
傭兵さんのただ働き物語

夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傭兵さんのただ働き物語

【Nコード】

N9075W

【作者名】

夢幻

【あらすじ】

これは少し不思議な世界のお話。

どんな世界にも人が集まれば街ができ、街が賑わえば人が集まる。しかし、表では生きられない人がいるのもまた事実。表の街があるならば、裏の街もあるのもまた事実。

そんな裏の街をぶらつく傭兵の主人公はある街で謎の集団に追いかけられている女性に出会う。助けを願われた主人公は対価に何を支払うかを問う。彼女はこう答えた。

「私の命でどうですか？」（「6倍数の御題様」よりお借りした御

題を使用した作品です)

はじめに

どうも。夢幻です。

自分自身のさらなるスキルの向上を目指します！

色々な方々がやられている「御題に沿って小説を書いていく」ということをしていきたいと思います。

使用する御題は「6倍数の御題」(<http://www3.tokai.ac.jp/~6times/>)さんから借りました。

借りた御題はこちら。

- 30の創作の御題3
- 1．突然の出来事
- 2．高鳴り
- 3．レンガ
- 4．役割分担
- 5．落とし物
- 6．最低限
- 7．使い方
- 8．セキュリティ
- 9．扉
- 10．旧友
- 11．輝石
- 12．パートナー
- 13．かつての言葉
- 14．必需品
- 15．微笑み

16 .	甘く見る
17 .	記憶の片隅
18 .	決意
19 .	カバン
20 .	夢心地
21 .	プレゼント
22 .	敬語
23 .	幸せの花
24 .	敵わない
25 .	それだけのこと
26 .	引き離す
27 .	真実
28 .	うねり
29 .	迷わない
30 .	知らない明日

基本的に一話一題の形で書いていきたいと思います。極端に短編になることもあるかと思いますが、そこら辺はご了承ください。

あらすじ

これは少し不思議な世界のお話。

どんな世界にも人が集まれば街ができ、街が賑わえば人が集まる。

しかし、表では生きられない人がいるのもまた事実。表の街があるならば、裏の街もあるのもまた事実。

そんな裏の街をぶらつく傭兵の主人公はとある街で謎の集団に追いかけられている女性に出会う。助けを願われた主人公は対価に何を支払うかを問う。彼女はこう答えた。

「私の命でどうですか？」

リンク

6
倍
数
の
御
題
:
h
t
t
p
:
/
w
w
w
3
.
t
o
/
6
t
i
t
l
e

お仕事その1 突然の出来事

それは夕方の出来事だった。

午後の時間帯にとある雇い主からの仕事を終わらせて報酬を受け取り、いつものようにその街の宿屋を探していたときのことだった。赤く染まりつつあるコンクリートの街並みを目に移しながら、俺は歩いていった。この街についてよく知らない俺は道なりにただひたすら進んでいる。古びた高いビル群に囲まれた通りはおそらく表社会には生き辛い人たちの恰好の住処だろう。かくいう俺も似たようなものだ。

宿を探し始めて二時間は経過している。いい加減うんざりしてきた。変わらない街並みがより一層気を滅入らせる。もう日は落ちてしまったのか、少しずつ街灯に明かりが灯りはじめる。

「これは野宿かな」

野宿でも別に構わないが、飯にはありつきたい。どこか店を探さなければ。そう思ったその時だった。横の細い路地から突然女性が飛び出してきた。職業柄突然の出来事には慣れていると言っても過言ではないため、ぶつかるといいう状態を避けてしまった。おかげで女性とは言っと。

「あなた一体誰ですか!」

どうやら待ち伏せを喰らったと踏んだらしい。

「ああ? いきなり出てきて何言っただ。お宅が何に巻き込まれてるかしらねえけど、俺は」

「ごめんなさい。急いでるんで」

女性は俺が進もうとしていた道をそのまままっすぐ走って行った。

「あ、おい」

勘違いをしておいて、さらに勝手に謝るなんて。人の話くらいは最後まで聞いておいた方がいいと思う。なぜなら。

「おい、今ここに若い女が出てきただろう」

「ああ？ だから、いきなり出てきて何だっというんだ」

こういう事件に巻き込まれているなら、俺みたいなやつが役に立つからだ。女性が出てきた路地からは、今度は女性の代わりに黒いスーツ姿の男達が三人飛び出してきた。どこからどう見ても裏社会の下っ端という感じだ。その中の一人がいきなり言葉を飛ばしてきたのだ。そして、そいつは俺の容姿を上から下まで隈なくチェックするかのようになると、さらにこう言った。

「ん？ 見たところお前傭兵だな」

「あららご名答。そして、あいにくだけどあんた方みたいな奴に雇われる筋合いは無いからな。金ならもうあるんでね」

俺はさっきの仕事で手に入れたじゃらじゃらした報酬の入った袋を懷から取出し、見せつけた。

「ふん。ならば、ある質問に答えるだけで金を払うと約束しよう」

「……どんな質問だ」

「その女はどこに行った。正しく答えれば金を払う。正しく答えなければ、コイツをくれてやる」

そう言うたそいつは腰に身に着けていた銃を右手に構え、俺に銃口を向けてきた。

「ワオ、正しく答えなかったら銃がもらえるのか」

銃声と共に俺の背後にある古い建物の窓が割れる音が聞こえた。

男の目を見るとこれ以上の言う機会はくれないらしい。短気なことで。俺はため息を吐きながら、俺の進もうとしていた道の方へ指を指しながらこう言った。

「この道を行って行ったら、真実だ。さあ金をくれよ」

「ふん、奴を追え」

「はっ」

他の二人に指示をすると、男はポケットから金貨を一枚取り出した後、俺に向かってそれを放り投げた。俺は至近距離で投げられたそれをなんとか右手でキャッチする。俺は金貨をじっくりと見つめた。偽造かどうか確かめるためだ。

「ふっ、本物だよ。そんな所で嘘ついてちゃウチらの商売にも傷が付いちまうからな」

「……どうも」

それだけ言うとき黒いスーツの男は先に行った男達の後を追いかけた。そして、俺はと言うと。

「まあ俺が進むのもそつちなんだけどな」

お仕事その1 突然の出来事（後書き）

リンク

6倍数の御題：<http://www3.totitle>

お仕事その2 高鳴り

その後、偶然ではなく必然として再び現場に出遭う俺。

相も変わらず追いかけられている女性とそれを追い回す黒スーツ男性が三人。表で生きる人たちが寄り付かない古い街並みにぴったりのシチュエーションだった。日はすっかり落ちてしまい辺りを闇が包み込もうとしていた。それを防ごうとする街灯の明かりがぼんやりと辺りを照らす。どうやら電気はまだ通っているようだ。

そして、俺が再び出くわしたその場面はこう。逃げようとひたすら逃げていた女性が行き止まりに差し掛かったところを、そうなるように仕組んだかのように黒スーツ姿の男性三人が銃を向けて構えている。ベタな展開だ。俺は黒スーツ達の後ろから姿を現した。なぜか。それは簡単だ。

「……金は支払ったはずだが」

黒スーツ姿の一人が俺には背中を見せたまま口を開く。なるほどリーダー格なのは伊達ではないということか。

「そうだな。しかし、俺はこの街の構成をよく知らないからな。道なりに沿って歩いてきただけさ」

これが真実だ。ぶらつくにしても「じゃらじゃらの報酬」を持っただまま裏路地に入ろうとは思わない。だから、大通りを歩いてきた例え、人が追われている現場に出くわしたあとでもだ。

どうやら逃げ場を失って絶望していた女性は俺の登場により、逃亡の機会をうかがっているようだ。目が違う。現場に出遭った直後の目は苦悩の目をしていたが、今は僅かな可能性をも逃さないような獣の目をしている。

「邪魔はしない方がいい。なんならもう一度金を渡そうか？」

黒スーツは俺に言葉を飛ばしながら、銃を構えていない左手から金貨を見えるように空中に放り投げた。そして、落下してきたところを再び左手の中へ収める。確かに金貨であることを確認した俺は

「ヒュ〜」と口笛を吹いた後、女性に向かって言葉を飛ばした。

「おい、女。お前、何か支払えるモノあるか」

「……」

「傭兵。勝手にしゃべりかけるな。次に話しかけたら邪魔をしたと見なすぞ」

「なんだよ、会話ぐらい別にいいだろうが。えらく生真面目な方なこと」

「あ、後払いでお願いしますっ！」

その言葉は響いた。俺が黒いスーツ姿の男達を茶化していた空気すらも沈黙へと変えて。突然の言葉に呆然と立ち尽くすだけの男が四人。だが、俺はすかさず口を開いた。笑いをこらえながら。

「ぶっ、分かった。後払いだな、くくっ」

駄目だ、笑いが漏れてる。そして、俺は続けてこう問う。

「それで何をして欲しい？」

「見れば分かるでしょう、この状況を助けてください！」

「了解」

その言葉と同時に俺は傭兵からの的へとクラスチェンジした。黒スーツの男達三人は俺の体の部位をそれぞれの的とみなしたようだ。全員が俺に銃口を向けてこちらを見ている。どうやら完璧に敵とみなしたようで彼らの目もまた獲物を狩る獣の目をしている。裏の人間の目をしている。

戦いは避けられないようだ。古いビル群、薄暗い夜、わずかな街灯の明かりと言った戦闘フィールドで俺は黒スーツ姿の男三人と戦闘をするのか。この状況で言うところの狂人のように伝わるかもしれないが、正直に言うところの高鳴りが抑えられない。言っておくが戦闘狂という訳ではない。

報酬が何か分からないために、この仕事を面白く感じているからだ。

お仕事その2 高鳴り（後書き）

リンク

6
倍数の御題：<http://www3.tottitle>

お仕事その3 レンガ

何が起こるか分からないのが日常であり、それに対して備えておくのも日常である。

いきなり黒いスーツを着た男三人に銃口を向けられるかもしれないと備えておくこと自体は、裏の街で生きる俺にとっては大した備えではない。という訳で俺は素早くズボンの右ポケットに手を入れると、中に入れておいたとあるスイッチを気づかれないように押した。

「今、何をした」

どうやら気づかれないように行動したつもりだったのに、リーダー格の奴には気づかれていたようだ。俺はそいつのその言葉に反応するように顔にやりと笑みを浮かべ、目を瞑った。俺のその行動が引き金を引く原因となったのか、その直後に銃声が鳴り響いた。

だが、それでも遅いのだが。

それらの銃声はすぐさま聞こえなくなった。なぜなら、俺の備えておいたモノが正しく届いているなら目の前に、それが落下してきただけだからである。

「……なんだ、何が落ちてきたっ!？」

俺は目を開ける。どうやら落下の際に地面を大きく抉ったようで、目の前はまるで意図して作り出したかのような土煙が視界を覆い隠していた。好都合だ。おそらく落下してきたものは地面に突き刺さったままだろう。ならば、それを手に取ること今晚の命は助かる。俺は仕方なく土煙の中を前に進み始めた。早足で。視界が良好になるまで、またはもう一度銃声が聞こえるその時までがタイムリミットだ。黒いスーツ姿の男達が女性を排除する目的で追っているわけではないのは、俺とのこのやり取りで分かった。

本当に排除するだけの目的なら俺にかまう必要が一切無いからだ。発見したら即殺して十分だろう。

そして、ちょうど右足、左足、右足の順番で前に進んで行つたところにはそれはあつた。右足に何かが当たつたのだ。その場所で右手を使い前方に柄を探す俺。何かに右手が当たる。握れるかどうかを確認した後握つてみる。間違いない。

良かった。過去に一度仕事の最中に今回と同じように呼び出した際に、間違えて物干しざおを掴んだことがある。恥ずかしかった。

俺はそれを今度は両手で握り引つ張り上げる。その時、ちょうど砂煙が晴れはじめた。相も変わらず三人の男達はこちらを向き、銃口を向けていた。おそらくリーダー格の男が指示したのだろう。そして、彼らの後ろに女性がいるかどうかを確認するが　どうやら逃げ出したようだ。

まあそれでもいい。

あんまり気にして歩いていなかったが、レンガの道路だつたようであつた。先程の破壊でレンガの破片があちこちに吹き飛んでいるのが見える。しかし、今はそれどころではない。銃を構える男たちが叫ぶ。

「何をしたかは知らないが、今度こそ生きていられると思うなよ」

「俺が言うのもなんだけどそれ死に台詞じゃないか」

俺は両手で握つたそいつを思いっきり引き抜くと、そいつを今度は地面に叩きつけるように前へ振り下ろした。地面に当たつた際の衝撃は先ほどまでとはいかないが、目の前で銃口を構える男三人を驚かせるぐらいの振動を生み出すことはできたようだ。

「銃弾よりも速くぶん回してやるよ」

振り下ろしたそいつを地面から引き抜き、今度は思いっきり振り回す姿勢を取る。体勢を崩していた男達は再び銃を構えようとする。しかし、できなかった。俺が振り回したそいつはおそらく男達の記憶の中で見たこともないような速度でぶん回されたのだろう。男達はかすかに「なっ」という謎の声を挙げながら吹っ飛んでいった。

「……しかし、この武器の本来の使い方とは異なるけどな」

「ならば正しい使い方を教えてもらおうかッ！」

突然聞こえた男の声。どうやら一人隠れていたようだった。そう

い**え**ば男達の人数を確認するのを忘れていた。声のする方を向く。その方向は行き止まりとは逆の方向。つまり、俺が来た方向。いつの間にか後ろを取られていたのか。

間に合わないかもしれないが俺はそちらの方を向いた。ふむ。何が起こるか分からないのが日常か。なるほど。

「ぐへっ」

「あらら、逃げたのかと思ったのに」

「支払うものはしっかり支払いますから」

男はどうやら自分自身も後ろを取られていることには気づかなかったようで、後ろから追われていた女性に何かで殴られた。

何かを確認するためによく見るとそれは、さっき俺が破壊した道路の破片だった。

お仕事その3 レンガ（後書き）

リンク

6
倍数の御題：<http://www3.tottitle>

お仕事その4 役割分担(前書き)

2011:09:23

脱字を修正。

お仕事その4 役割分担

「それで、何で追われてるわけ？」

もうすっかり夜になってしまった。さびた看板、いつから使われていないのか分らないビル群。こんな古びた街を照らす明かりは街灯と月のみ。人の気配のしない裏路地を俺と女性は肩を並べて歩く。俺が言葉を発してから数秒後、彼女の口が開いた。

「理由分らないんですか？　もしかしてあなた、この街の人じゃないんですか？」

「何だよ、それ。この街に住んでたら誰でも知ってるくらい君って有名人なの？」

「いや、別にそういうわけでは……」

「まあ、雇い主が話したくないなら聞きはしないけど。それよりも何を支払ってくれるのか、それが気になるね」

「それは……」

突如、俺の隣から女性の姿が消える。いや、消えたわけではなかった。彼女の足が止まっただけだった。

数歩進んでからそのことに気づいた俺は、止まってしまった彼女の方を振り向く。顔を下に向けてしまった彼女の手は前で握りしめられたまま、震えていた。

口元をよく見ていなかったが、ふと彼女の声が聞こえたような気がした。もしかしたら今一瞬何かをつぶやいたのかもしれない。よく聞き取れなかったことを彼女に伝える。すると彼女はこう答えた。

「私の命でどうですか」

その言葉にきょとんとしてしまった俺が居た。傭兵人生を歩んできた俺の中で初めての報酬だった。

「……君も面白い人だな。何か裏があるのか？　それとも純粹？」

「この街に居れば、近々知ることになると思います。私の本性とそれに賭けられた賞金を」

「本性ねえ。そいつは一体どういうことなんだ、まさか二重人格とか」

「な、何でそれを！」

まさかの茶化すつもりで飛ばした言葉が真実だったようで。本気で彼女は驚いていた。平然を装っているが俺だって内心驚いている。真実が判明したところで、こんなところで会話を繰り広げていても先程の奴等のお仲間さん方が到着するのを待っているだけだ。俺は彼女にどこか行く当てはあるのかを聞いてみた。

「一応無茶苦茶に逃げていたわけではないわ。この先に私の経営するお店があるの。そこなら隠れられるから」

「なら、道案内を頼もうかな。その代わりと言っては何だけど俺がある程度警戒はしとくから」

「なるほど役割分担ですね。分かりました」

一つだけ気になったことがある。そこが待ち伏せされていたらどうするのかということだが、それは聞かないことにした。

前言を撤回しよう。待ち伏せはほぼ不可能だ。

俺は確実に道が分からなくなった。裏路地と言われる場所がどれほどの複雑さで構成されているものかを思い知らされた。どの方角へ歩いているのか、どこから来たのか、同じ景色ばかりで何が異なるのかさっぱりだ。それでも、先導を頼んだ彼女は一心不乱に目的地へ進んでいった。彼女が一番恐ろしく思えた今日この頃。

混乱している俺の目の前で彼女の足が止まる。どうやら目的地に辿り着いたらしい。道に迷ったわけではないことを祈る。突然彼女が指を指した。指の先には看板で派手に「黒の管理人」と書かれた看板を掲げた建物があつた。周辺の建物といい勝負をしている。ぼろぼろだ。

「ここが私のお店。不動産屋を経営しています」

「ほお、追われてる奴が不動産屋か。それで、経営難で今にも潰れそうなんじゃないのか」

「お客様は無くならないです。だって」

そう言い残して彼女は店と言い張る建物の中へ入って行った。入ろうとした俺の目の前に再び彼女が現れる。厳密には俺の目の前には何かのメモ帳が現れたのだが。

見ると言わんばかりに差し出してきたので、彼女の手からメモ帳を受け取ると一枚目をめくった。この店の利用者だろうか。名前がいくつも書いてあるようだ。しかし、その隣には普通は書かれないような数字が書いてある。

「ここに借りに来るのは表じゃ借りられない顔を持った人達。それぞれがいろいろな目的で借りに来ます。隠れ家だとか静かに暮らしたいだとか」

「この隣にあるのは賭けられた賞金の額か。もしかして狙われてるのはこれか？」

「そうです。どうやら誰がどこに住んでいるのかの情報を狙う方々が多いようです」

「なるほど。だから、君を殺すわけではなかったのか」

そう一言つぶやいた瞬間にもすごい勢いで俺の手からメモ帳が奪われる。突然の出来事に「おっ」と言ってしまった。彼女の方を見るともう姿は消えていた。

夜になって少々寒くなってきたようだ。俺はあえて「寒っ」とつぶやきながら店の中へと足を進めた。

お仕事その4 役割分担（後書き）

リンク

6倍数の御題：<http://www3.tottitle>

お仕事その5 落し物

「はい、サンドウィッチです」

「どうも。とりあえず飯にありつけて良かった良かった」

テーブルの上に出された皿には二枚のサンドウィッチが無造作に乗っかっていた。そのうち一枚を手に取り、口へと運ぶ。中身は卵とハムがサンドされていた。まあまあな味付けだ。

「美味しい味付けを求めているなら表で食べてきてくださいよ」

いきなり女性が冷たい口調で俺にそう言ってきた。知らない間に口に出していたようだ。思いつきり批判を受けた俺。もぐもぐと口を動かしながら店内を見渡す。外からの様子と比べても酷い有様だった。

まるで中で戦闘を繰り広げたのかと思われるほど置かれている家具には、刃物で切った跡や銃弾で打ち抜かれたような跡まで残っている。店の床にしてみれば、いたるところで板がまるごと抜けており注意しなければ、足だけでも落ちてしまいそうである。同様に壁も天井も傷だらけである。一見すると何かの事故現場かと思えるほどである。

そんな店内の中でもきれいなものは一応ある。俺が今椅子に座りながら肘をついているこのカウンターだ。まるでバーにあるように長いそのカウンターは受付を行うだけに必要とされる領域をはるかに上回っている。口の中のサンドウィッチが消えたついでに口を動かして聞いてみる。

「受付にしては長いカウンターだよな。不動産屋の前は違う仕事でもしてたのか？」

「えっと、前この店を持ってた人がバーを経営してたって話は聞いたことがあります」

「まあこれだけ長いカウンターをバー以外の何に使って言うんだろっな」

「分かりませんよ、何か飲食店を経営していたのかもしれませんが」
そう言いながら彼女は、カウンターの向こう側で何かの書類を整理している。

なるほど。俺が今されているように向こう側から料理を出して、こちら側でそれをいただくという形式か。長い間の俺の食生活は自炊か雇い主からの配給、安くて不味い店の料理、同業者からの心無い同情だったからな。いろいろな事情でそれ以外には立ち入らないようにしてたからな。

俺は二枚目のサンドウィッチを口に運ぶ。今度はレタスとハムにマヨネーズのトッピングか。大好物だ。

「それで」

「はひ？」

すみません、礼儀作法がなってますでした。俺は口に食べかけのサンドウィッチを入れた状態で返事をした。そのせいで言葉はおかしな音で彼女の耳に届いた。彼女は俺を呆れた顔で見ている。俺でもそうするだろう。口の中身を急いで飲み込み、今度こそまともな返事を返した。

「さっきの武器はもう一度降ってきませんよね」

「降らせないで呼び寄せる方法もあるから心配しなさんな」

俺はズボンの右ポケットに手をつ込み、とあるスイッチを押す。実はスイッチには二種類あり、以前押したスイッチとは別のスイッチを押した。ちなみに、見せるつもりはさらさら無い。彼女の目は俺を信じられないと言わんばかりに疑惑を持った目と化している。急いで呼び寄せるとするか。

ポケットから出した右手を開き、手の平を俺の右側に向ける。すると、その手の平の先におぼろげな輪郭が浮かび上がり始めた。

「ほええ」

何とも言えない感想を彼女が言う。それに反応しても仕方がないので俺は微動だにしなかった。徐々に形が現れてきた。幾何学的な刀身。装飾も一切ついていない、ただ握り易さだけを求めたグリッ

ブ力のある持ち手。それが俺の武器。

実体化は完璧に完了した。一度これも失敗したことがある。子供の頃に間違えてゴミ箱を呼び寄せたことがあり、一種のトラウマとなっている。その場の戦闘は放棄したのもいい思い出だ。

「そ、それちよつと握らせてもらえませんか？」

「別に拒否はしないけれど持つことはできないと思うぜ」

彼女はカウンターの横から出てきて俺の武器の持ち手に触れようとした。その瞬間、何かの音が店内に広がる。俺はそれがすぐに何かが落ちたときの音だと分かった。なぜなら俺の目には何かが彼女のポケットから落ちるのを目撃したからだ。

「何か落ちたみたいだけど」

「触れちゃダメですっ！」

俺が手を伸ばしかけたその瞬間に、彼女は叫んだ。落ちたそれは一見すると……カード？ なぜ「触れちゃダメ」なんだろうか。それほど大切なものなのか。薄汚い汚れた裏社会の奴に触ってほしくないモノとか？ 自分で自分をそこまで卑下できる俺もすごいな。

「そんなに嫌がるなら別に触れることはしないけれど」

「良かった。実はそれ、触れると電撃を喰らうんです」

「へえ、それは面白い仕組みだな。触れると爆発したり、腕が切れたり、一生くつついたりする仕組みは知ってるけど初耳だな」

「冗談じゃないですからね、一応。あと、これから起こることも冗談じゃないので」

そう言うとき彼女は俺が振れることをあきらめたカードに触れた。

その瞬間、何が起こったのだろう。いや、ある程度の奇妙奇天烈が起きても驚かない俺でもさすがに驚いた。触れた彼女の髪は突然くるくるのパーマがかかり始めた。彼女の顔がこちらを向く。彼女の変化がもう一つあることに気づいた。彼女の目は青色だったはず。今の目は黒色に変化している。すると、彼女の口元がにやりと微笑みを浮かべた。そして、ゆっくりと口を開いた。

「こっちの顔では初めましてだろ？ 二重人格だってアンタ見抜い

たじゃん。これが裏のアタシ。何か文句でも？」
表は静で裏が動。典型的な二重人格だ。

お仕事その5 落とし物（後書き）

リンク

6
倍数の御題：<http://www3.tottitle>

お仕事その6 最低限

「二重人格というより人としての本質が変わったみたいな気がするぜ？」

「惜しいところまで来るね、アンタ。詳しいことは話すほど親しくないからしないけれど、そういう類のもんよ」

「ふ〜ん」

突然変身した女性は、触れていたカードを右手の中へ収めると、カウンターの中へと入って行った。さきほどの彼女の言葉からすると記憶の共有はできているものの実質的な意識は変化するというところか。俺の武器に一切触れないまま戻るとは。

店の扉が開く音がした。古い建物であるが故に木々の軋む音が想像以上に響き渡るのがこの店のウェルカム入店時の音。そのせいで嫌でも入店したことに気づかされる。

それにしても、さすが裏のお店と言うべきか。もう真夜中だと言うのに客が来るとはな。

「基本的には夜にしか開かないの、このお店」

いつの間にか口に出していたのだろうか。俺は大して驚きもしないでその会話に乗っかる。

「そういう類のお客を相手にするためだな」

「そういうことよ。それで、アンタはどういったご用件なのかしら？」

俺との会話に一区切り終えさせ、たった今入店されたお客様に声をかける彼女。全身をとどころ薄汚れたローブをまとっているため、その体の特徴がよく分からない。身体の大きさからしてまだ子供なのではないだろうか。ちなみに、縦の大きさだ。そのお客様がこちらに向かって歩いてくる。歩いているときに見える足元は、どこをどう歩いてきたらそうなるのか分からないほど傷ついた裸足。そして、そいつは俺の隣まで来ると頭に被っていたローブを

脱ぐと彼女に向かってこう叫び始めた。

「へ、部屋を貸してください」

彼女の目は突然何かを冷たくあしらうような目に変化する。その状態の目がローブを脱いだお客様の隅々を、まるでチェックするかのように見ていた。ローブを脱いだお客様は、髪をいつから整えていないのか分からないくらいいばさばの長髪で、黒いのか茶色いのかよく分からないくらい汚れてしまった髪質。そして、いつから体を洗っていないのか分からないくらい顔は汚れていた。それでも、声から少年であることがうかがえる。

彼女のその行為が何かの審査なのかよく分からないが、その目が再びお客様の顔に戻ると、彼女の口は開かれた。

「何に使うつもりで？」

「じゃ、借金取りから逃げるんだ。そのために隠れる場所が必要で」彼は彼女の顔から目をそらすように下を向きながらそう答えた。

震えるようなその声には、おそろくわずかな希望とこれを拒否された時のこと、それから絶望を考える恐怖が感じられた。問から返ってきた答えを聞いた彼女は次にこう言った。

「いいわ。それでは契約のお話ですが、あなたに賭けられた懸賞金はいくらかしら？」

「け、懸賞金……」

突然の言葉に驚きを隠せないみずばらしい少年。隠せない驚きは下を向いていた彼の顔を思わず彼女の方へ向けてしまうほどの力を持っていた。少年の言葉に彼女は「ええ、懸賞金」とだけ答えて、この場では悪魔にしか見えない微笑みを少年に見せた。

「無いです」

「あらあごめんなさいね。どこの噂を嗅ぎつけてやってきた子犬ちゃんだか知らないけれど、ウチの借りるための最低限の条件は『懸賞金』とか『裏社会での有名度』みたいなものが必要なの？ 見たところお客様は裏社会で有名ではないような方に見えたので懸賞金の方をお尋ねしたのですが。すいませんね、出て行ってもらえます

？」

少年の言葉を引き金に彼女の口から次々と言葉の弾丸が放たれた。最終的には少年を突き放す驚異的なミサイルが放たれた訳だが。

それでも少年は引き下がろうとしない。その目を意志ある目に変えて。

「い、嫌ですっ！ 絶対に借りて、借りて帰りますっ！」

「黙れよ小僧」

銃弾が放たれる音が高らかに響き渡る。比喻表現ではなくこれは実物。俺の目には少年の右肩の上の辺りを銃弾が飛んでいくのが確認できた。少年は目を丸くした状態で彼女の方を向いたまま動かなくなつた。彼女はと言うと、左手に銃……にしては幾何学的な形状をしたモノを構えて立っていた。

「こつちも商売なんだよ、分かんねえのか小僧。アンタのその威勢を使つてなあ裏の世界で大暴れしてきたなら貸してやるよ。それが無理ならちつちやく這いずり回つて有名にでもなつてきな」

「うっ」

大抵の少年はそうなるだろう。どんな事情があつたのかは分からないが、借金取りに追われ裏の街のこんな不動産屋に隠れる場所を借りに来るならば、そうとうな苦勞をしてるんだろう。世間一般的なレベルで計るとだが。それに少年と言う年齢であることも原因の一つにあるだろう。何の原因かと言うと。

少年は大粒の涙を両目に浮かべていた。そして、涙声で、もはや何も聞き取れないようなその声で、こう言つて店から姿を消した。

「ありがどございました！」

「すばらしい感謝の言葉だな、あの少年。まさかあの状態でお礼を言つて出ていくとはな」

空気と言う称号を手に入れても良いと思うほどずっとやり取りを見ていた俺は彼女にそう言葉を投げた。彼女は銃と思われるモノをカウンターの上に静かに置いてから、俺に言葉を返した。

「たまに来るんだよねえあんな野郎ども。でも現実見せてるだけだ

よ、現実。そもそもローンが払えなくなったらそいつの懸賞金で払ってもらう契約になってるんだから」

「くくく、なるほど。損はしないビジネスになってるってわけか」「そういうこと」

思えば仕事を済ませた後の出来事だった。連続で起きていた。俺の体は悲鳴を上げていた。つまり、そろそろ眠りにつきたくなくなってきた。

彼女に眠るための部屋を貸してくれと言うと、まるで先程の契約のようなやり取りをさせられたので、俺は「そういう冗談はいらないから」と一言つぶやいた。彼女はにやりと笑みを浮かべた後、部屋の場所を教えてくれた。

カウンターの隣には扉があり、その扉が二階へとつながる階段への扉だった。二階の部屋を好きに使ってくれと言われたので、階段を上がって右側の部屋に入った。もちろん武器を持ってである。その部屋は限界までコスト削減に費やした部屋が広がっていた。テーブルとベッドしかない。

「寝る」

誰もいない部屋でそうつぶやいた俺は、武器をテーブルの上に置きベッドに倒れこんだ。

お仕事その6 最低限（後書き）

リンク

6
倍数の御題：<http://www3.totitle>

お仕事その7 使い方

それは朝の出来事だった。

朝日が一切入ってこない裏路地に建てられた建物の二階で寝ていた俺。一応仕事をこなした次の日なので体が疲れているのは当然のことだった。それを言い訳にして朝なんか来なくていいからそのまま目が覚めたら昼も越えていましたって感じになることを望んでいた。

無理だった。

「おはようございます。一応、朝ご飯を持ってきましたけど」

この建物をリフォームするべきだと思う。いや、それが無理ならばこの部屋だけでもリフォームして欲しい。ドアの開け閉めの際に生じる音はまさに不協和音そのものだ。名付けて安眠妨害システム疲れている仕事人には勘弁してほしいシステムである。

邪魔された安眠から現実世界へと戻ってきた俺は、ドアを開けたままこちらを見ていた女性に「どうも」と寝起きの顔で一言礼を言った。それを聞き取ると、彼女はにこりと笑ってドアを閉めた。不協和音再び。寝起きの機嫌がさらに悪くなる。壁の防音など無いに等しく彼女が階段を下りていくのが丸聞こえだった。

ため息を吐く俺。とりあえず持つてきてもらった朝飯をいただく。ベッドを除く唯一の家具、テーブルの上に置かれた朝飯に目を移す俺。

ザ・サンドウィッチが二つ。思考が停止した。

「まあ飯にありつけてるだけ感謝すべきか」

不機嫌度最高状態でサンドウィッチに手を伸ばす。中身が昨日とは変わっていたことに少なからず嬉しさを感じ、機嫌を良くする俺だった。今日の中身は、一つがトマトとレタスとキュウリにマヨネーズのトッピング。もう一つはスクランブルエッグにトマトケチャップ。不味くはない。

無言でそれらを平らげる俺。ふと、気づく。

武器はどこに行った？

無駄な空きスペースがありすぎるこの部屋の中にそれらしき姿は無い。まさか。

「私が握った瞬間に銃のような形に変形してしまつて」

「……見せてみな」

「そ、それで突然根つこのようなものが伸びてきて、手に固定されてしまつて」

カウンターの上に出された彼女の右腕。右手はしっかりと俺の武器を握っている。いや、握るような状態で動かないのだろう。その銃の弾倉部分から伸びる木の根のような部分が彼女の右手首にしっかりと絡みついてしまっている。

カウンターの向こう側から己の腕を見せている彼女の表情は困惑を隠せない。逆側で座りながら絡みついてしまった部分を見ている俺は、ため息を吐く。そのため息をどう受け取ったのか彼女は焦りながら口を開いた。

「もう戻らないとか!？」

「馬鹿野郎。俺の武器なんだからちゃんと返してもらうに決まってるんだろ。俺の武器は特殊な武器で、握った人の戦闘スタイルに合わせて形状変化する武器なんだよ」

「形状変化？」

「そう、お宅はどうやら銃による戦闘を得意とする……まああつちの顔が得意そうだからな。だから、コイツは銃になったんだろう。だがしかし、そう簡単には使えないのさ」

「あのお、武器の説明はいいので早く戻してくれませんか？」

正論である。

俺は彼女の右手に手を重ねる。突然の出来事に彼女は目を大きくして驚いたが、俺は「まあ見てな」と一言つぶやいた。重ね合わせたその瞬間から彼女の右手は光り始めた。そして、数秒が経った。

「戻った……」

光が治まると同時に彼女の右手から銃は離れ、カウンターの上に四角い銀色のキューブが一つ転がっていた。これが俺の武器の大元。転がっているキューブを右手で握ると、元の幾何学的な刀身を持つ俺の武器に戻った。これが俺の武器の戦闘形状。

「あなたの武器であることは分かりましたから」

どうやら俺の武器ということを連呼したことに腹を立てたらしい。さすがに、しつこ過ぎたか。

「それにしても何で離れなくなってしまったのです？」

「この武器にも使い方があったよ、使い方が」

そう言いながら俺は武器を指差した。そして、思い出したようにさつき食べた朝飯の皿をカウンターのに出し「ごちそうさま」と一言つぶやいた。

お仕事その7 使い方（後書き）

リンク

6
倍数の御題：<http://www3.tottitle>

お仕事その8 セキュリティ(前書き)

2011:09:26

誤字を修正。

お仕事その8 セキュリティ

「まず、この武器は存在自体があやふやに作られている」

「あやふや？」

という武器の説明を俺がしようとする途中で、聞き手の女性が「飲み物入れてきますから」と中断させる。それに俺は乗っかって「コーヒーある？」とリクエストを注文する。「ちよつと待っててください」という言葉と共に、二階へと通じる扉を開けて姿を消した。この建物の構造を全て把握できていない俺はそもそも厨房がどこにあるのかが分からない。

数秒で彼女は戻ってきた。

「皿を忘れたので」

「なるほど」

カウンターの上に置いてあった皿を慌てて掴むと、再び彼女は姿を消した。

店内の窓から外が見え、人がちらほら。誰を見ても表の街を歩けるような服装ではなかった。見るからに裏社会の下っ端な奴がいた。昨日出会った黒スーツにそっくりの恰好をしている。もしや裏社会の下っ端の正装なのか。かと思えば、真夜中に訪れてきた少年と似たような汚いぼろぼろのローブを被りながら、ありとあらゆるゴミ箱と向き合っている人もいる。

千差万別。十人十色。まだ二人しか見ていないことと言えることではないが。

「それで？」

どうやら数分が経っていたようだ。彼女はマグカップを二つ両手に持って姿を現した。俺の目の前に一つ置くともう片方のマグカップはすぐに口に運んだ。会話を再開する前に、俺も飲んでおこうとマグカップに手を伸ばし、口へと運ぶ。ゆっくりと流し込んだコーヒの苦みを楽しんだ後、カウンターにマグカップを置いて続きを

話す。

「この形を保つために必要な物があるんだ。それは使い手の『意識』」

「意識？」

「そう。ちなみに、無意識も駄目。はつきりとした意識があつて形が作られる。寝ている最中は形が作られなくなるから収納にも便利」

「遠回りな説明はいいから私の手首に巻き付いた原因を教えてください」

順序を追って説明しないと理解できないと思うからそうしているのに。急かす彼女の勢いに負けて俺の説明も早口になる。

「そして、使い手の意識がおぼろげな状態でその使い手以外の人が武器を手にとると、武器が危ない状態だと判断する」

「武器が判断するんですか」

「頭の良い武器だからな。判断した武器は手に取った人と同化しようとする」

「どうか……？ もう、難しい話は勘弁してくださいっ！」

「そんなに難しくないって」

必死に弁解。説明を求めている、それはいくらなんでも失礼すぎると思うが。そんな彼女の言葉に少々呆れながらも俺は続けた。

「武器がその人の体を吸収しようとするんだ。だからあのまま根っこが絡みついた状態でいたら君は武器の一部にプラスチックエンジン出来てたってわけ。そういう道もありかもしれないぜ？」

「無しですっ！」

突然の大声に俺は小さく笑うと最後にこの一言を付け加えて武器の説明を終わりにした。

「簡単に言えば一種のセキュリティが働いたってわけ」

お仕事その8 セキュリティ（後書き）

リンク

6 倍数の御題：<http://www3.tottitle>

お仕事その9 扉（前書き）

2011:09:26

分かりづらい表現をほんの一部修正。

お仕事その9 扉

「それで報酬はいつ支払ってくれるのかな」

意地悪な口調で彼女に聞いてみた俺。

実のところは、前の仕事での報酬がまだじゃらじゃら音を立てるほど残っているの、いつになっても気にしない。そして、こういう取り立てのビジネスにかかわる彼女なら恐らく支払いをしないで姿を消すという真似はできないだろう。もし姿を消したら、と一応考えてみたが別にどうでもよかった。

「私の命」と言う報酬が一体何を意味するのか。それが知りたかった。

俺が聞いてから、しばらく下を向いて黙ったままだった彼女がようやく口を開いた。

「ぶ、分割払いつてできますか?」

この発言には俺も正直驚いた。支払う報酬は「私の命」。そしてそれを「分割払い」。いったい俺の手元には何が残るのだろう。気になるが、今はとりあえず彼女の疑問に答えてあげることにする。

「分割でも一括でも払ってさえくれれば何でもいいんだけど」

「分かりました」

彼女はそう言うとう度はその表情をにこやかに変えて、こちらを向いた。

「それなら、しばらくここに滞在してください。そうしないと払うことが出来ないの。泊まる際には今日使った部屋を使ってください」

謎だらけである。「私の命」を「分割して」支払うために「ここに滞在していて欲しい」。彼女ほどの裏の世界に顔の知れた人物ならば、どこかの団体を通じて俺にその報酬を支払えば良いのだ。例え、この街に居なくても流通は他の街にも繋がっているため、それで未納と言う状態は防げるはずだ。なぜ、そこまでしてここで支払

いたいのだろう。信用の為だろうか？ それもあり得ないだろう。俺程度の人間が出した評価なんかは、裏の世界に何の影響も与えない。

ちなみに、そんな俺でも裏の世界ではそこそこ名は知られている。ランクにすれば中の下。知らない奴の方が多い。だから、昨日のようないことが起きるんだな。

そんなことはどうでもいいにしても、この謎が妙に変なので俺は滞在することに決めた。

いや、一つだけ、もう一つだけ気になることがある。しばらくあの部屋に居座るということになるならばアレだけはどうかして欲しい。俺は顔を真剣な表情へと変貌させ、彼女の顔に迫った。

「お願いがあるんだけど」

「な、なんですか？」

彼女の目が色々な方向へと動き始める。彼女の顔に迫ったその状態で俺は口を動かし続けた。

「ドアを直して」

「はい？」

「はい、修理終わりましたよ。これで、変な音も出なくなるし扉の開閉もし易くなりますから」

「ありがとうございます」

サングラスをかけているのに上下作業着姿の男を俺は今見ている。作業靴、作業用のグローブ。だが、サングラスをかけている。屋内でサングラスの意味があるのかとツツコミを入れたくなかったが、安眠妨害システムを生まれ変わらせる行為の邪魔をしたくは無かった。修理を頼んだ場所は言うまでもないが、俺がこれから使う部屋の扉である。強烈な不協和音を奏でるそいつは安眠妨害システムと呼んでもいい代物だった。さすがに、そのままでは俺の機嫌が最悪に不調の状態で毎日を迎えることになるので、修理を彼女に頼んだ。

修理の当ては最初からあったという。いくつかの専門業務を、ま

とめてサービスとしている企業が以前、お客様としてここを訪れたことがあるとのことだった。さっそく彼女はそこに連絡を取った。手段として伝書鳩を使用したため数十分かつた。

その時の俺は「内容が盗まれちゃうんじゃないのか？　こんな伝書鳩じゃ」と一応裏の世界としての心配をしたが、彼女はそれをきっぱりと否定した。何でも「私の伝書鳩の性能はそんなしょそこの鳩とは格が違う」らしい。ペットを飼う親バカの発言としか聞き取れなかったので、俺は流した。

そうして連絡が取れた企業から一人、修理を担当する人がやってきて、今その修理が終わったというところだ。「お金の方はこちらでよかったですね」と、彼女は担当のサングラスにこの修理の支払いをしている。料金の確認をしたあと、彼は「またお願いします」と一言礼を言っただけで会釈をしたのち、修理に使用した工具を持ちその場を後にした。裏の世界にしては礼儀作法がしつかりとしている。

「表の世界でも業務を行っている企業だから当たり前です」

「それにしても、今の人がどこかで見たような顔つきだった……かも」

「それなら、昨日見たではありませんか」

その言葉に俺はきよとなつた。いったい彼女が何を言っているのかさっぱり分からなかったからだ。昨日と言えば、もしかして真夜中に尋ねてきた泣き虫のローブの少年のことかもしれない。と言っ考えをぶち壊す答えを彼女は俺に飛ばしてきた。

「私を追ってきた三人組。あの人達の兄弟ですよ、今の人」

「ええ？」

お仕事その9 扉（後書き）

リンク

6
倍数の御題：<http://www3.totitle>

お仕事その10 旧友

「気になるから聞くけれど、何で知ってるんだ？」

「私と、私を追いかけてきた人が」

店内には物音一つ立たない。カウンターに並ぶ椅子に座った俺と、カウンターの向こう側に立つ彼女。口を開かないまま時間が過ぎていく。

どれくらいの間が必要なのだろうか。何かを考え決断するにしても長すぎるような気がする。それとも、何かを迷っているのだろうか。俺の頭の中では様々な可能性を考えては消し、考えては消しを繰り返していた。

その沈黙は彼女が口を開くことで破られた。

「昔友達だったんです」

「……君がレンガで殴った相手？」

ようやく聞こえた彼女の声に俺は、静かに事を確認した。

「そうです」

彼女は声のトーンを落として答える。

「君の覚悟の上での行動なんだ。さっさと気持ちを切り替えるべきだとは思っけどね。裏で生きようとしてるんだったら、いつか友を殺す覚悟くらい」

友を殺す覚悟、か。

「そうですね、それが正論です。この世界に生きるなら覚悟を持つて生きることが必要なんですよ」

そう言う彼女はいきなりカウンターから早足で出てきた。何をするつもりなのだろうと彼女をじっと見てみると、今度は店の入り口のドアを勢い良く開け、外へ出た。物音がしなくなったと思いきや、今度はガタツという音だけが聞こえて彼女が店の中へ入ってきた。

不思議な光景がずっと続くので彼女を見つめていると、カウンタ

「の向こう側へ行こうとする瞬間にこちらを見て言われた。
「今日は昼も夜も閉店にしますから」

店の入り口のドアの下には「閉店」と書かれた小さな木の板が置いてあった。

「ここはどこだろうか」

人通りがほとんど無い裏通りに構える店の前で立ち尽くす俺。あちこちから吹き抜ける風は通りに落ちているゴミをただ無造作に転がしているだけだ。暇だ。

じゃらじゃらと鳴らすほどのお金はあるのにすることがない。とりあえず表通りに出なければ。俺の目標が決定した。「表通りに行くこと」だ。

「ギャンブルとかはしないんですか？」と彼女に質問されたが、俺はギャンブルをしない。負け運に恵まれた俺は今までの人生で一度も勝ったことが無い。俺の友がイカサマで俺を勝たせてくれたことは一度あるが、友はもう二度とやりたくない、と言っていた。

ふと考える。この街には情報屋はいないのだろうか。

ありとあらゆる情報網を感知し、それらをまるでアンテナのように使用する彼ら。どんな街にも一人はいると思われるのだが。

「呼んだ？」

目の前にいきなり男が現れる。目が大きく、左目に眼帯をした銀髪のとんがりヘアで、薄汚れたローブを着た男。

突然の出来事に体中に緊張が走り、思わず右ポケットに手をつ突っ込んでしまったが、その容姿と顔を確認した際に緊張はあつという間に解けてしまった。右ポケットから手を出し、俺はそいつの顔を指差しながらこう言う。

「お前、いきなり、現れるな」

「なんだよおー、道に迷ってるから助けに来てやったのにいー。ほらほら情報欲しいんだろお？ この街の地図が欲しいんだろお？」
腕をぐるぐる回しながらそう言う。鬱陶しいキャラだ。どうやら

身の丈に合わないローブを着ているらしく、腕が袖の位置まで届いていない。だるだるに垂れ下がったローブの両腕先端部分をこちらに向かつてはたきながら、彼は言葉を続ける。

「俺が紹介した仕事良かっただろ？ 報酬。たんまりもらえてさあ。なあ、地図渡すから一割くれよお」

「お前から情報を買うのは絶対にしないから。他の情報屋から買った方が安く済む」

そう言って彼をあしらうと、俺は進もうとしていた道を歩き始めた。もちろん彼を避けて。

「情報は質だろおー。分かったよお、安くしておくよお。五割引きでどうだ？」

「それで普通の値段なんだろ、どうせ」

振り向かず足を進める。俺の背中に彼の言葉が突き刺さる。言葉の最初に彼の文句が付いてくるが、情報の値段はどんどん安くなる。そして、ついに九割引きになった。それと同時に俺は足を止め、振り返る。

「買ってやるよ」

と言った俺の目にそいつの姿は映らなかった。言葉は聞こえたはずなのに。しまったな、歩きすぎたか。

「まいどありー」

俺の背後から声が聞こえ、後ろから伸びてきた手には丸められた紙切れが握られていた。俺はため息を吐きながらその紙切れを受け取る。

「金貨二枚な」

男が言った通りのお金を、俺はじゃらじゃら音を立てる報酬の入った袋から取り出す。

「いやあ九割引きで買えるなんてな、やっぱ持つべきものは昔からの友だな」

俺は棒読みの口調でそう言いながら、男が差し出してきたその手に金貨二枚を置いた。「まいどあり」という言葉だけを残して男は

俺が歩いてきた方向へと走って行った。

「……なんてな。これでもどうせ五割増しなんだろう、本当は」

そう言いながら俺は進もうとしていた道を、もう一度歩き始めた。
おそらく損をして友から買ったであろう、この地図を広げて。

お仕事その10 旧友（後書き）

リンク

6
倍数の御題：<http://www3.tottitle>

お仕事その11 輝石

そして、俺は表の街に出た。

裏の世界とは違ってかわった街の様子には新鮮さが感じられる。人が人と語り、人が人に物を求め、人が人を連れ歩く、そんな賑わいのある通り。まさしく大通りと呼ぶのにふさわしい場所だろう。裏の世界へと通じる細い路地から出てきた俺を、ちらりと見ていく街の人が見えた。彼らからしてみれば、俺は怪しい人物に見えるのだろう。早々にここを立ち去ることにする。

「しかし、広いな。そして、暇なこの時間をつぶす場所が無い」

大通りを歩きながら独り言をつぶやく俺。周辺を見渡したあと、友から買った地図を見る。特に面白そうな場所は無い。仕方がないので大通りをぶらつくことにした。なぜなら

「よっ男前の兄ちゃん。ちょっと寄っててよ」

「いやいや俺なんかは店主のおっちゃんには敵わないぜ」

「ガッハッハ！ 兄ちゃんなかなか目が良いじゃねえか。そんな兄ちゃんにどうよ、この剣」

「悪いな男前のおっちゃん。あいにく懷はたんまりだけど武器は間に合ってたんだ」

「なんでえ、そうかい。また欲しくなったら言ってくれよお！」

「はいよ」

大通りの両端には、隙間を空けずに露店という露店がずらりと並んでいる。種類も様々なもので日常雑貨から食料品、宝石を始め、さっきのように武器なんかも取り揃えている。中にはペットまでも露店で取り扱っている店もある。一種のショッピングモールと言ったところか。

ある程度歩いたところで俺は不思議な露店を発見した。

「いらつしゃい。何かお探して？」

立ち止った俺に話しかける店主。「いや特に」と言いながら俺は

その店の品物を見ていく。商品として取り扱っている物はルビーやエメラルド、サファイアなどの宝石類。取り扱われているものたちは高価に見えるものがほとんどだった。ただし、例外が一つだけあった。俺は隅の方に置かれた輝きを知らない宝石を指差した。

「これは？」

「それはあこの街では有名なシロモノなんだよ。とある条件でしか光らない輝石なんだってさ」

店主が口を開こうとしたその瞬間にその声は聞こえてきた。俺が声のする方向を振り向くとそいつはおらず、逆側にそいつは立っていた。とりあえず普通に姿を現して欲しい。

俺は今度こそそいつの顔を目で捉えた後、こう伝えた。

「その情報にはいくらの価値がある」

俺は怒りと言う感情を顔にこれでもかというくらい表し、そいつの顔に迫る。そいつはそんな俺から逃げようとせず、さつきと変わらない調子でこう言い放った。

「おいおい、日常の会話にお金で何とかなる価値なんかねえよ。そもそも俺とお前の仲だろうが」

その言葉を聞いた俺はそいつの顔から離れることにした。それでも気になるのは輝石についてだ。とある条件とは一体どんな条件なんだろう。俺は顔の表情を元に戻し、謎の輝石を見ていた。

「兄ちゃん、そんなに見つめるのならそいつを買わないか？」

しばらく輝石を見つめていたせいかな店主がいきなりそんなことを言ってきた。

「いや、遠慮しておく。条件という謎が気になるが、俺の生活には必要ないからさ」

「そうかい。まあ大抵のお客さんはそう言って帰ってくんだよ」

「じゃあ俺が買おう。おじさんいくら？」

地図を買った際に渡した金貨二枚を店主に見せながらそいつが言う。店主が笑いながら答える。

「あいにくだね、その二十倍が必要だよ」

「金貨四十枚かあ。高いなあ」

「『有名なシロモノ』ですから」

「それでは」

そのやりとりを見た後、俺はその場を去ることにした。その後、そいつが何度も俺の露店めぐりを邪魔してきたことは今日一日で一番腹が立つこととなった。

お仕事その11 輝石（後書き）

リンク

6
倍数の御題：<http://www3.tottitle>

お仕事その12 パートナー

「それで、どうして、お前はここにとどまってるんだい？」

大通りの散策は突然現れた情報屋のせいでまったくと云っているほど俺は楽しめなかった。仕方がないので近場の飲食店に入ることにした。豪勢なレストランと言うわけではなく、簡易的に用意された木製の机と椅子に座り、注文した料理をいただくというお店。大通りに面したお店であるがゆえに気軽に入ってきてもらいたいということで、屋外にお店は作られていた。天井の代わりに張られている布を通して、色とりどりの光が店内を照らす。

空いている場所を適当に探す俺。後ろから声をかけてくるあいつ。
「なあ、どうしてなんだよお」

「ついて来るなら空いてる席探してくれよ」

店内は大通りの賑わいをそのまま写してきたように、ほぼ満員じやうたいだった。周囲を見回すと人だらけであり、空席を探すのは困難を極めた。かのように見えた。

「あそこ。空いてるぜえ」

と彼が言つと、食事を終えて立ち上がるうとしている人たちが見えた。あれは「今から空く」と言う状態ではないだろうか。まさかとは思うが。

「ほらよっ」

その言葉が早かったか、彼の行動が早かったかは俺の目では判断できない。そいつは俺の背後からいきなりナイフを二本その机目にかけて投げ始めたのだ。一本目のナイフは俺の右肩上を通過すると、通行しようとする人達のわずかな隙間を、迷いなく何物にもぶつかることなく机に突き刺さった。二本目のナイフは左肩上を通過していた。こちらも同様にまるで初めから決められていたかのよう、わずかな隙間を一直線に飛んでいき、一本目のナイフの隣に突き刺さった。

「席取り完了」

「お前いい加減にしろ。ここは俺たちの居た街とは違っただよ」

「いいじゃねえか、別に誰か減るもんじゃあるまいし」

「そういう発言をするなっ」

周囲からの視線が突き刺さるのが分かる。こちら迷いは一切無い。とりあえずナイフ投げ野郎が無駄に張り切って確保したテーブルに座ることにする。

「ご注文の前に銀貨一枚いただいてよろしいでしょうか？」

向かい合う形で座った俺たちのテーブルに即店員の女性がやって来た。当然だろう。にこりという営業スマイルを俺たち二人に見せながら言葉では弁償の要求をしてきた。気のせいだろう、声の口調が営業用ではない感じがする。

俺はすかさず目の前に座る原因発生元に対して金を支払うように注意する。

「ごめんなさい、その人に席取りに行けって言われて。それでえ、無理だっけって言うたら何でもしていいからあって。弁償はしたいんですけど、銀貨持ってなくてえ。原因のこの傭兵から金貨一枚もらってください」

こいつは友を売った。

「それとおつりはあ、いらないですう」

何気ない感じの人を演じようとして頑張ってるし。

「それでは」

店員さんがこちらを振り向く。その微笑むは作られた仮の物。今その微笑みの目が少しずつ、少しずつ開こうとしている。その中に見える瞳はまるでこちらを逃がさんとする獣の瞳。彼女の口がゆつくりと開く。

「金貨一枚を」

恐怖に負け、じゃらじゃらの報酬袋から金貨一枚を取出した。報酬袋を見せた際に伸ばしてきた手の平に俺は金貨を乗せる。その後、彼女の微笑みは営業スマイルへと変わり「注文は何にしますか」と

聞いてきた。

「お前とパートナーを組んだときもこうだった」

「ぱーとなー？　いつ組んだっけえ」

運ばれてきた料理を口に運びながら話し込む俺たち。俺が頼んだのはパスタ。なかなか香辛料の香りと食材の触感が食欲をそそる。その目の前で、そいつは真っ黒い何だかわからないものを食している。俺と同じパスタ料理の一種だと言ってくるが何かは分からない。とにかく黒い。

「昔だよ、昔。新人同士で仕事上手くないよなあってお互い酒場で愚痴ったときに」

「えーつとお、忘れたあ」

「俺がお前から初めて情報を買った日だつて」

「もしかしてえ最初の共同依頼のときい？」

余談だが、こいつとの付き合いは十年を過ぎる。お互いの仕事がつまくいっていなかった時に出会い、それぞれの困り果てたところを助けるというスタンスで、お互いの知名度を上げていった。

戦闘能力としては俺の方が高いため、戦闘絡みの仕事にはこいつが俺に情報を回し障害を取り除くというやり方。反対に情報操作などに弱い俺をカバーするために、真実を暴きだして敵の本性から始まり、人には内緒にしておきたい恥ずかしい過去までを、こいつが調べ上げていく。

「仕事の都合上お互いに必要な部分を外部委託しただけでしょお。今でもしてるじゃんかあ。そうそう、それで何でお前ここにとどまってるのあ？」

フォークでこちらを指差す情報屋。俺は呆れた顔でこう返す。

「お前の方がよく知ってたんだろ。情報屋をそこまでなめた覚えはないぜ」

「ふふふ、どうも」

不気味な笑みを浮かべ、再びフォークをよく分らない漆黒とも

言える料理に向ける情報屋。俺とそいつは料理を食べ終わるまでの間、昔の話で盛り上がった。ちなみに、黒い料理を食べ終わるまでになぜか二時間かった。

お仕事その12 パートナー（後書き）

リンク

6
倍数の御題：<http://www3.tottitle>

お仕事その13 かつての言葉

「金で動く奴と動かない奴がいる。人で動く奴と動かない奴がいる」
「どうしたあ？ いきなり？」

そして、俺たちは歩いていく。

賑わいを見せる大通りではなく、裏通りを歩く俺たち。大通りを歩いてきたせいか、いつも以上に裏通りの静けさが身に染みる。俺の靴が地面と奏でる音や、何でもないただの小さな風が吹く音でさえも聞き取れる。

情報屋が食事を終わらせることに時間をかけたとは言え、その後、大通りを見て回ったが興味が湧く物は何も無かった。唯一引つかかる輝石を除いて。

「新人の頃を思い出したただけだ」

「その言葉、俺がお前に言ったんだよなあ」

「ああ。新人の時は分からなかったが、こんだけ仕事続けてると嫌でも分かるようになる」

「もう、年かあ？ 現役引退でもするう？ 老後の心配する前にお買い得な情報がここに一つ」

「いいかげんにしろ。俺から金を巻き上げようとするな」

初めの頃こそ、表では生きられない奴等を見かけていたが、だんだんとその姿も消えていった。道の周辺に散らかるゴミ。廃墟と化した建物が挟んだ道を進む俺たち。まるで、その建物は俺たちを見下ろしているよう。日の当たらない裏の世界。

そろそろいつもの空気に戻り始めていた。

いつ、どこから、どんな理由で狙われるか分からない。それが常識。いや、それがルール。守らなければ、というより守ることで生きていく。それがこの世界の最低限の常識。

張りつめた空気の中で、俺たちはお互い周辺の気配を探り始めた。
「……買わないけれど、友として答えてくれ」

「なにい？」

俺の隣で茶化しながら肩を並べ歩く情報屋。そんな彼の態度とは裏腹に真面目な雰囲気です。尋ねる俺。

「お前、誰かに追われるような仕事してるか？」

「はあ？　今俺フリーだつーの」

「そうか。ならそこに隠れているのは俺を追ってきた奴か？」

俺たちは立ち止まる。そして、数メートル先にある細い路地を指差した。

すると、その細い路地から数人、男性と思われる人物が出てきた。全員揃いも揃って前に出会った黒スーツ姿と同じ格好である。数人の内一人が一步こちらに近づいてきた。おそらくリーダー格のものだろう。そして、そいつはこう話した。

「やっと見つけたぜ。俺たちを蹴散らしてたんまり報酬はもらえたのかな？」

そして、俺は思い出す。この街に来たときの最初の仕事を、俺の隣にいるコイツから紹介された仕事を、報酬がじゃらじゃらの仕事を。最後の思い出が強烈だったので、彼のその言葉に反応して俺はこの行動をとった。

「ああおかげでこんなにたつぷり」

じゃらじゃら鳴らしながら黒スーツ数人に報酬の入った袋を見せた。何とも言えない表情に彼らはなった。

お仕事その13 かつての言葉（後書き）

リンク

6
倍数の御題：<http://www3.tottitle>

お仕事その14 必需品

そして、銃弾は飛んできた。

馬鹿みたいに報酬を見せた俺と、その隣で立っていた情報屋は、左右別の道の端に向かって低空姿勢で飛んだ。幸い両端に細い路地があつたため、俺たちはそこに隠れた。

さっきまで歩いていた通りには、まるで横殴りの雨のように銃弾が飛んできている。一向に止むことを知らないその雨は、おそらくこちらから打開しない限りずっとこのままだろう。めんどうだ。

仕方がないので武器を呼び寄せることにする。俺はズボンのポケットのスイッチを押す。

「この街の地面は壊れやすいみたいでありがたいな。砂煙に紛れて攻撃で、積みだ」

不意に頭に何かがぶつかった。銃弾……だったら俺は死んでいるし、それに小石ほど固くない。想像しても始まらないので、何がぶつかってきたのか周囲を見渡す俺。すると、丸まった小さな紙筒を見つけた。

広げてみると、そこには字が書かれていた。

『いつも通りの戦法でお願いしますう。ま、こっちはテキトーに戦わせていただきますう。』

情報屋の字だ。

ふと、情報屋の方を見るとアイツもこちらを見ていた。どうやらこれを読むのを確認していたらしく、俺が見たタイミングと同時に親指でOKサインを送ってきた。何か企んでいるのはお見通しである。だが、俺は戦法を変える気は無い。

「そろそろだな」

スイッチを押してから数秒が経った。狙い通りの位置に狙い通りのタイミングでそれは落ちてきた。落下の衝撃を通りの地面にぶつけ、そして、地面をえぐりながら突き刺さる武器。案の定、砂煙が

生じていた。目の前が見えずに銃弾を発射する馬鹿はいないらしく、銃弾の雨は止んでいた。

ひとまず武器を取りに路地から出ようとする俺。まず、右腕だけが通りへ出る。しかし。

「貴様が俺たちに出会ったときもこうだった！ 同じ攻撃を繰り返すお前に我らが対策を練らないとでもっ！？」

銃弾が俺の右腕をかくす。咄嗟の判断のため、完全に避けることはできなかったが被害を小さくすることが出来た。

どうやら敵さんは砂煙の中でも敵を狙えることができる武器を用意したらしい。この状況では俺はただの的だ。動くことは不可能だろう。

だが、それが俺の狙いではない。

「ぐあぁっ！」

「なんだっ！？」

どうやら動き始めたようだ。俺たちを狙う黒スーツの男達の悲鳴が聞こえる。おそらく目で見えない敵に襲われているのではなく、目で『追うことができない』敵に襲われているのだろう。それが情報屋の戦闘スタイル。

「あの隣にいた男の仕業かつ！？ くそっ 一体どうなってるんだ」

「ご名答。だけど、時すでに遅し。じゃ、失礼して」

リーダー格の男の物と思われる悲鳴が響き渡った。

「視覚の条件が悪いと怖いくらいに戦闘能力が向上するんだな」

「ええー。でも戦闘は得意じゃないからさあ。でも、暗殺とかだったらいけるかもなあー」

恐ろしい発言である。

俺は隠れていた細い路地から出て、通りの様子を見回していた。戦闘の場所となった通りは、銃弾が作り出した跡が周囲の建物に刻まれていた。地面にもその跡が残っている。主な跡は俺の武器のせいだが。

通りには情報屋が倒した男達が横たわっている。全員が首を切られていた。男達の周辺は濁った赤色が自由気ままに地面を染めていた。

「裏の世界に生きるんだから、戦闘ぐらいはできないとおー。ある意味必需品って感じい？」

「それで、いくらとるんだ」

「へ？」

コイツのことだから、これもビジネスに絡ませて俺から金を巻き上げるのだろ。そう考えて聞いたその言葉に、コイツはまるで驚いたような反応を見せた。そして、俺に笑いながらこう返した。

「大通りでも言ったじゃねえか、俺とお前との仲なんだ。片方が困ってるときに片方が助けるのは別にビジネスじゃねえよ」

しばらく言葉が出なくなった。だが、数秒後に俺は笑った。小さな声で「そうだな」と何度も言いながら、俺は武器に近づいた。

そして、俺たちは再び歩き始めた。

お仕事その14 必需品（後書き）

リンク

6
倍数の御題：<http://www3.totitle>

お仕事その15 微笑み

静寂、ではないが風音が聞こえるぐらいに静かな空間。

視界に入っている傷ついた物たちは一切動こうとしない。動くはずがない家具たちだから当たり前だ。

「傭兵の人、早く戻ってこないかな」

一言つぶやいてみた。

嫌なくらいに静かすぎて時計の針が進む音がはつきりと聞こえる。長いテーブルに両肘をつけ、前に姿勢を倒す。自分自身の態勢が変化しているだけで、周りの空間が変化していないのは当たり前だ。つまり、さきほど何も変わらない状況が続く。

勢い余って閉店にしたことを少しだけ悔やんでいる。多少動揺してしまっただけとも言え、もう少し冷静になる必要があったのではない。いろいろと考えてしまう。

次の瞬間、風音が止んだ。

まるで時が止まったかのように静寂に変わる。時計の針は進んでいるが、音がしない。何が起きているのか判断する間も無く、怪奇現象と呼べばいいのかあり得ない現象が起こり続ける。

突然、店の扉が勢いよく開いたのを「見た」。音がしないため、視認することではしか事態を把握できない。さらに、誰が開いたのか、誰が入ってきたのか、が分からない。そこに「誰もいない」のだ。

「何が……？」

事態の把握ができない私はつい声を漏らしてしまう。こういう場合は落ち着いて冷静に対処する必要がある。そのことをついさっき理解したばかりではないか。

「ようやく、見つけた」

声がするのと同時か。はたまた声が先か、それすら私には分からない。

目の前におぼろげな虹彩が浮かび上がる。そして、それが徐々に

はつきりとしたものに变化していったかと思うと、突然目の前に白い物体が現れた。それは人の形をしているが、両腕、両足とも人のそれとは異なる幾何学的な形状をしている。さらに、顔と思われる部分には必要となる目、鼻、口、耳と言った部位が存在しない。白い塊がそこにあるだけ。

「探しました。偽名、使って、何、やってるんですか」

棒読みの声。そして、顔と思われる部分はこちらを見ている。

「誰……ですか？」

恐怖のあまり声のはつきりと出ない。言葉をはつきりと出せない。こんな物体私は知らない。知らないはずなのに相手は私を知っている。何が、目の前にいるんだろう。

「記憶、消された、ですね。戻りましょう、記憶、取り戻せます」

その言葉が聞こえたのち、白い顔に变化が起きた。顔に幾何学模様が浮かび上がったかと思うと、それらは顔の表面を縦横無尽に動き始めた。動いて動いて動いて、そして、止まる。そして、私に見えた白い顔の表情は。

極限なまでに目を見開き口を横に広げた、微笑み。

お仕事その15 微笑み（後書き）

リンク

6倍数の御題：<http://www3.tottitle>

お仕事その16 甘く見る

それは遠い遠い方向。

しかし、記憶の中におぼろげに残っている方向から聞こえた。そ

の音は 爆発音。

「……なんだ？」

「ふーむ、確率的には妥当な時間って感じー？」

情報屋は聞こえた方向を指差し……指すら見えないローブなので、まるで腕を指しているようには見えるが、ともかく指を指した。俺と情報屋の視線がそちらに向けられる。古びた街並み、人の気配の感じない街並みの中から、煙が立ち昇る。何かを知らせるための「のろし」のように、その煙は高く、はるか上空へと昇り続けていた。そうだ、あの方向は。

「アイツの店がある方向じゃねえかッ！」

「気づいたあー？ どうするのあー？ 向かうのあー？」

心配していることはただ一つ。お金のことだけだ。少しずつ払うとは言われたが、一切払わないとは言われていないからだ。ただ、それだけだ。

「無事であるかどうかは関係ない、せつかく手に入れた宿なんだし、向かうに決まっている」

情報屋がうなずいたかどうか、否定したかどうか、確認するよりも前に俺は走り出していた。

何が残っていたのだろうか。

もう分からないほど、黒く焼き焦げたその跡。閉店にすると聞いた彼女は店の前に閉店の看板を出していた。小さな小さな看板だったが、それすらも見当たらない。俺の目の前に広がる焼野原を見て、後から付いてきた情報屋はこう言った。

「……謎だらけでしょー？ なぜ、このお店は吹き飛んだのか。そして、誰が吹き飛ばしたのか。それは、俺たちに関係しているのか。彼女はどこへ行ったのか。大方、疑問に思ってるのはそれぐらいいいー？」

「教える。金は払うから」

「へ？」

俺は左手で情報屋の肩を掴んだ。右手ではもう武器を呼び寄せる準備を完了しており、この場に姿を現すだけとなっていた。徐々に具現化される俺特有の武器。情報屋は笑いながらこう答えた。

「なになにー、俺でも知らないことはたくさんあるんだよおー？」

「……てめえ、さつき「妥当な時間」だって言ってたよな。聞き間違いないじゃなければ、それは何らかの情報を知っている奴しか思えねえ時間のはずだ。つまり、単純な推理かもしれないねえが、てめえは何か情報を持っている確率が高いってことなんだよ」

「……このお店の管理人さんは、ただの管理人さんじゃないんだよおー？」

俺の左手に力が入る。右手に握りしめられる程度まで武器は具現化してきた。俺は情報屋に急かすように怒鳴りつけた。

「そんなことは知っているツ！ 高額な賞金がかけられた……」

「『その程度』？ あの人は、実は追われている身なんだよ？ ああ、それくらいなら知ってるか」

一瞬、凶悪な表情を見せたかと思いきや情報屋はまたケラケラと笑い始めた。何も変わっちゃいないこいつのことだ。真面目に答えようとなんて思っていないのが、本性だろう。

「甘く見過ぎなんだよ。この場所が他人から特定されないだなんてそんなことある訳ないじゃないかあー。小さい子供だって来るだろお？」

「……知っていることを教えろと言っているんだ」

俺の声を無視しながら、掴まれた情報屋は言葉を止めない。まるで、狂ったかのように笑いながら言葉を、続ける。

「だから、『この場所を特定している』誰かなんて簡単だろう？
ほら、君は最初この街で誰から依頼を受けたんだい？」

「……なんだと？」

最初に依頼を受けたのは、この街の。俺が言う前に情報屋が笑いながら、空を仰ぎながら、言った。

「そうさ、裏社会の全てを知る、裏社会を取り仕切るこの街のボスだよ！」

目の前の情報屋が言いたいことを言い切ったのか、俺の左手から姿を消した。まるで、軟体動物かのようにするりと体をくねらせて、俺の掴みから抜けた。そして、同時に気づいたことがある。

報酬の袋が少し軽い。

「ま、情報屋の商売は相手さんの需要に合わせて供給するもんなのさあー」

と、一言だけ言うんじゃやらじゃら鳴らしながら、おそらく俺の報酬の半分ぐらいが入った袋を情報屋が見せつけてきた。ちなみに、数メートル離れた位置からである。情報の価値にそれだけあったのか疑問のように思うが、彼女の現在位置が気になる。それに見合う情報をあいつから買うのも、もう嫌だ。

「……報酬払ってもらわないといけないからな」

自分に言い聞かせるように、そう一言だけ呟いて、黒焦げと化した店の前を後にした。

ちなみに、情報屋は俺の報酬を半分盗っていった次の瞬間には姿を消していた。

お仕事その16 甘く見る(後書き)

リンク

6
倍数の御題：<http://www3.tottitle>

お仕事その17 記憶の片隅

もう、空は暗くなっていた。

使用されなくなった機械、材料がまるで博物館に寄贈でもするかのように、そのままの状態で放置されている。誰一人として清掃を行わなくなったこの場所を この廃工場を俺は訪れた。

この街に來た時以来のこの場所に。

「ほお、お前がああの情報屋が紹介した傭兵か」

一言で説明しよう。どこかの事務所のような場所だった。

それは、朝のことだ。それでも薄暗く、まるで電気でも通っていないかのような日当たり。お互いの顔が認識できるかも怪しい明るさだ。それでも、こちらからは相手さんの顔は確認できた。まるで、管理職が座るようなその机に奴の姿が確認できた。

そして、そいつが金髪のオールバックなので、俺は笑いをこらえるのに必死だった。

「そうだ。依頼があるんだろう？ なるべく単刀直入に説明をお願いしたい」

笑いをこらえるのに必死なためである。面倒だからではない。我慢する俺の顔は、おそらくシリアスなシーンを作り出すときの表情をしているに違いない。顔の筋肉が全部緊張しているのが分かる。少しでも油断したら 笑ってしまう。

そんな俺の心を知ってか知らずか、金髪オールバックはこちらの話に返答するのにゆっくりと時間をかけた。そんな時間は必要ないのに。

「そうだな。まず、貴様にはこの街のある場所へ向かってもらう。大して危険な場所ではない。そこで、ここに書かれている通りのことをやってもらいたい。それが依頼の全てだ。必要最小限のことだ

けを済ましてくることだ。そして、報酬は片付いてこちらへ戻って来た時に払おう」

「……その報酬とは？」

確認しなくてはならないことがあったので、それだけを確認する。限界に近い。そして、この金髪オールバックが話をしている間ずっと気になることがあった。おそらく、俺のこの質問に答えるときにもそれをするのだろう。すごく、気になる。

「これぐらいでどうだ？　いくらが望みか知らないが、これぐらいあれば予想を大きく上回るのだろう？」

「この依頼受けましょう」

やっぱりした。この金髪オールバック、会話する度前髪の生え際を気にしているようだ。俺と会話している間もずっと、机の上にある鏡でチェックし続けていたのだ。勘弁してほしい。何歳なのだろうコイツ。

そして、俺はその部屋を後にした。ずっとこらえながら。

指定された場所への地図を渡された。地図には一本道しか見えるようになつておらず、鉛筆かそれとも筆か何かで他の道が塗りつぶされていた。しかし、一度迷った。似たような景色が多く、「曲がり角を右に曲がろう」とかメモされていても、目の前にあるものが曲がり角なのかどうかも怪しいので意味がなかった。

何十分経過したか覚えていないが、指定された場所にたどり着いた。重油の臭いだろうか、なんの臭いか分からない異臭がする。片づけを途中で放棄したかのように積み上げられた瓦礫たち。

場所の見学は後にして、他の紙に書かれた依頼内容を読む。

「『そこは廃工場だ。瓦礫の山を片付けてくれ。瓦礫のように見えるものなら破壊してもらって構わない。邪魔してくる自立型のロボットがいるかもしれないが、それでも破壊してもらって構わない。要するに、破壊してもらって構わない』。破壊するとしてしか書かれてないじゃねえか」

異臭がするのでさつさと終わらせたかった。俺はお気に入りの砲剣を目の前に出現させた。この瞬間に一ヒットである。目の前に散らかっていた巨大なゴミどもは跡形もなく粉碎され、飛び散った。
「ん？」

その奥に続く道を見つけた。

「そして、俺は進んでいった」

記憶の片隅の中にある道を、俺は今も進み続けている。

目の前に現れたのは工場の入り口である巨大なシャッターがそびえ立っていた……はずである。しかし、シャッターと言う名前の凛々しい姿はそこにはなく、ゴミと称されるかボロボロと称されるかの末路しかない物体が存在しているだけだった。

まあ、当然のようにぶっ壊したのは俺なのだが。

覚えているのは、こちら辺で警備用のロボットが出てきたことだけだ。その奥に進んでみたが、セキュリティの扉があり中に入ることが不可能だった。扉自体を破壊することは一応試みた。俺の砲剣が死にかけたから一撃で終わらせたが。

そして、歩き続ける俺の目の前にそのセキュリティの扉があのと変わらずに現れれば、ここは。

「やっぱりか、この街のボスは俺に何をさせたかったんだ」

俺の目に映ったのは、俺が見たその扉にちょうど一致する、ぽっかりと空いた穴だけだった。

お仕事その17 記憶の片隅（後書き）

リンク

6
倍数の御題：<http://www3.tottitle>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9075w/>

傭兵さんのただ働き物語

2011年12月5日19時01分発行